

## 薬剤師として、国際協力を志す

最終回

青年海外協力隊員として、  
ガーナでHIV対策に取り組む薬剤師の奮戦記です。

### HIV陽性者支援活動

ガーナにはおよそ23万6000人のHIV陽性者がいるといわれています(2008年)。そのうちの6割が女性です。毎年約2万人が新たにHIVに感染しています。

ガーナで最初にHIV感染が認められた1986年当時、ガーナには抗HIV療法が導入されていませんでした。そのため多くの方がエイズで亡くなり、「エイズは死をもたらす恐ろしい病気」というイメージが人々の中に根付いていきました。更に、学校などでは、やさしいエイズ患者の写真などを見せて脅かす方法で教育が行われてきました。そのため、今でも、人々の間ではHIVとエイズを混同していたり、HIV陽性者に対する偏見が強く残っています。

HIV陽性者が自分たちの権利を守り、自立して生きていくことを支援するために、郡内にはHIV陽性者のグループがあります。毎月会合を開催し、40名ほどのメンバーが集まり、グループの運営についてや、健康管理についての情報提供を行ったり、そのほか必要なサービスについての案内などがあります。

参加者の中にはHIVに感染したことが周りの人に知られて、家族や村から追い出されてしまった人もいます。そのような事実があるために、身近な家族や友人にすら感染を打ち明けることができず、孤独に苦しんでいる人もいます。そういった不安や悩みを少しでも和らげようと、毎月の会合では、体験談をシェアする時間が設けられています。

ある中年の男性は、妻をエイズで亡くし、それをきっかけに自分も感染していることがわかり、その事実が村中に知れ渡り、周りの人から「あの人のせいで奥さんが亡くなった」とうわさされ、それまで営んでいた商店には客が一切来なくなり、商売ができなくなった、という体験を話していました。

また、「私は恋愛や結婚はもうあきらめた」と涙ながらに話す若い女性もいます。

時に陽性者の人たちが自分を差別視していたり、十分な情報がなために、希望を持ってない人たちもいます。また自ら感染していることを認められない人や、継続的なケアや治療を拒否する人たちもいます。

そのため、それぞれのニーズに合わせて必要な情報提供を行ったり、個別で継続的にカウンセリングを行うことも、重要な支援のひとつとなっています。

メンバーの半数以上が女性で、10代の若者から60歳前後の年配の方まで様々な人たちが参加しています。子ども連れの参加者も何人もいて、医療の発展により、HIV陽性者の方々が長く健康に生きることや、家庭を持ち、出産・子育てをすることが可能になったことが伺えます。

私の所属する郡健局では、医療面での支援を主に行っており、健康を保つための生活習慣についてや、栄養と食べ物、日和見感染症の症状と予防についてなどについて話をして、参加者の質問に答えたり、結核のスクリーニングなどのサービスを提供したりしています。



後町陽子(ごちょう・ようこ)

2003年-2004年 薬学生の集い(APS-JAPAN)会長  
2005年-2006年 国際薬学生連盟(IPSF)本部役員  
2007年 明治薬科大学卒業  
2008年9月~青年海外協力隊としてガーナ イースタン州 アコンボのアソジャマン郡保健局にてエイズ対策分野で活動中  
連絡先: yohkocco04007@yahoo.co.jp  
ブログhttp://yohkotin.blogspot.com/  
Website http://www.geocities.jp/yohkocco0407/



郡の病院の薬局で、抗HIV薬の処方データベースに入力している薬剤師

また、読み書きができないために有用な情報にたどり着けない人、支援を受けるのに必要な手続きをできない人もいるため、そのような手続きの手伝いや案内をしたり、郡役所や中央政府からの食料配給を手伝ったりもしています。会合はいつも明るい雰囲気、メンバーは和気藹々と語り合い、笑いが耐えませんが、現地語で行われているミーティングに私がついていけないときは必ずいつもメンバーの誰かが英語に訳してくれたり、気遣ってくれます。彼らの明るい笑顔にいつも励まされ、元気をもらい、活動を続けています。



郡のHIV陽性者グループの会合で、同僚の保健師が結核について講義している



抗HIV薬の整理をしている薬剤師



他のJICAボランティアとHIV陽性者に対する差別・偏見を軽減するキャンペーンを行っている

### ガーナの病院にて、ある一日。

今日は郡の病院の妊婦検診の日。朝8時、妊婦検診のHIV検査を手伝いに、いつもお世話になっている看護師さんにお土産のアボロ(現地の甘い蒸しパンのような特産品)と小魚フライを買ってバイクに乗っていざ病院へ。

検査の担当者が見当たらないので、しばらく待合室にいる妊婦さんや、看護実習生とおしゃべりして、待機。一時間後、検査担当者がやってきました。

「準備できたら呼ぶから」

と、言われ、また1時間くらい待ちます。そして言われた一言は、「あー検査キット、きれてんだ」

ということで、本日は検査なしとなり、後日また出直すことになりました。そのあと病院長に挨拶して、受付など各部署に挨拶へ。

ガーナでは、挨拶をととても重んじています。職場でも、朝、挨拶に回るだけで1時間以上かかる日もあります。受付や待合室は大変混雑していて、「国民保険の影響で、保険がある人は基本的な医療費が無料となったため、みんなが病院に押し寄せてしまい、スタッフは朝から晩まで休みなく働かなくてはならない」と受付の担当者が嘆いていました。

午後は薬剤部にお邪魔して、抗HIV治療(ART)担当者に最近の様子を聞きに行きました。

日本では20種類以上の抗HIV薬が認可されていますが、ガーナで使える薬は10種類くらいで、そのほとんどが安価で手に入るインドで作られているジェネリックです。「その中でも、流通が滞ったり、予算不足で薬の入手が困難なこともしばしばある」と担当薬剤師が話してくれました。

この病院は郡内でHIV治療が受けられる唯一の場所。今でも病院まで来るのに2時間以上かかる村に住んでいる人々もいますが、約160人近い陽性者の人が、継続的なカウンセリング、定期的な診察や免疫力のチェック、ARTや日和見感染症の治療を受けることができています。今日も、陽性者の方が数名、診察と薬を受け取りに病院に来ていました。